



代表取締役 社長

見目 正明

## 記念誌発刊に あたって

富貴沢建設コンサルタンツは、1972(昭和47)年6月に株式会社富貴沢建設コンサルタンツとして創立し、以来半世紀にわたり、設計コンサルタントとして県内はもとより県外の社会資本整備の一翼を担ってまいりました。これもひとえに、発注者をはじめ関係者皆様方のお力添えの賜物であり心から感謝申し上げます。

顧みると、創立当初は小規模な構造物の設計からはじまり、高度成長期の潮流にのり、大規模な道路・橋梁の設計など数多くの社会資本整備に貢献し、発注者そして県民の信頼を得てきました。

昭和から平成、そして令和と時代は変遷し、コンサルタンツ業界を取り巻く環境も大きく変化しています。近年では、高度情報化、グローバル化、少子高齢化に加えて、地球温暖化への対応、自然災害の激化・頻発化への対応、さらには新型コロナウイルスへの対応など様々な課題が山積しております。

このような時代の要請や課題を真摯に受け止め、地域のコンサルタントとしての使命を果たすために、当社のISOの品質方針「誠実と信頼をモットーに、発注者の良きパートナーとして、品質の継続的な改善に心掛ける」に基づき、地域の発展に寄与してきました。

今回、記念誌の発刊は、会社創立50周年記念事業の一環として、当社の50年の歩みを、“曖昧な記憶”から“鮮明な記録”として残すために編纂したものです。

この記念誌が、地域の社会資本整備に携わる関係者の一助となれば幸いです。

最後に、富貴沢建設コンサルタンツは、これからも、地域に根を張り、地域に寄り添いながら、少数精鋭の技術者集団として「小さくてもキラリと光る技術力(Compact Shining Engineer)」に磨きをかけ、地域にとって最善のデザインを提案し続けていくことを約束し、巻頭の挨拶とします。



代表取締役 会長

江口 亜子

## 50周年を迎えて

株式会社富貴沢建設コンサルタンツは、おかげさまで創立50周年を迎えました。永きにわたる皆様のご厚情に深くお礼申し上げます。

創業者である私の父、富貴沢長之は、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所(当時)勤務時に、技術士を取得し宇都宮で起業しました。以前、創業はやはり故郷の宇都宮の地を選んだのかと聞いたところ、たまたまと申しておりましたが、他の地であつたら、ここまで思い入れて仕事に打ち込めなかったのではないかと感じています。

自宅の一室を事務所に、事務経理、営業、技術の3人で始めました。建設省関東地方建設局などからの仕事をいただき、2年後には社屋を建築し移転しました。その後国、栃木県を中心とした関東一円の官公庁、当時の道路公団などから仕事をいただきました。このことは弊社の企業理念、「誠実と信頼」を実践してきた証だと思っています。昔の建設コンサルタントのイメージそのもので、創業当初は夜遅くまで仕事をして、時には朝までに仕上げた資料や図面を印刷して打ち合わせに行くということもありました。3月はとにかく忙しく、家には「4月になったらね」という意味不明な標語のようなものがありました。

まったくガランとしていた社屋が手狭になり、近隣に新社屋を建て移転したのは、創業から11年後でした。その後も建設業界にとってよい時代だったと思います。この間に若い技術者がたくさん育ち、実績を重ねることができました。「誰それが技術士に受かった」、「どこそこ栃木県内で初事例の橋梁設計をすることになった」などと景気のよい話を嬉しそうにしていました。政策により公共事業が削減された際に、一時会社としても縮小しましたが、その後、小池新社長のもとに持ち直しました。近年はまた業務量が増加し、忙しい毎日となっています。会社としても円熟期を迎え、変革の時期にあるのかもしれない。これまでの実績を踏まえ、真に選ばれる企業を目指したいと考えています。

これまでの50年は会社を大きくし、体力をつけるためにありました。次の50年は、業務にあたる姿勢に変わりはありませんが、社員ひとり一人の価値が上がり、幸せを感じることができる会社にしていきたいと考えています。関係者の皆様には、これからも倍旧のご支援とご協力をお願いいたします。それに応えるべく更なる精進をお約束します。

## 歴代社長 メッセージ

初代 社長

富貴沢 長之



### 50周年に寄せて

令和4年6月26日に、弊社は50周年を迎えました。これまで多くの方にお世話になり、感謝の念に堪えません。

昭和47年当時、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所に勤務しておりました。故郷宇都宮での勤務がかない、気が大きくなってたのかもしれない。念願の技術士を取得し独立しました。

それから50年、いい時代も苦しいこともありますが、幸いなことに、思い出すのは社員とともに創造した橋や道路、そこに至るまでの愉快的苦勞などです。また、幸いなことに後を引き継いでくれる頼もしい社員にも恵まれました。

お世話になった方々へのお礼もままならず、心苦しい限りですが、今後も見守っていただければこれ以上の幸甚はありません。

第二代 社長

小池 健彦



### 八十路を迎えて おもうこと

突然の原稿の依頼を受けて驚くやら、まだ忘れられていないのかとの少々の嬉しさもあって今の少々の思いを書いてみます。

私の今は昨年7月に80歳を迎え毎日をなんの仕事もなく、なんとなく一日を過ごしているような毎日です。ただ趣味として以前からやっていた模型作りが唯一の楽しみでけっこう時間を使っています。

富貴沢建設コンサルタンツも50周年を迎えまことにおめでとうございます。

私が代表になったころは40周年の頃で、その当時は会社そのものが揺れ動いていたころで、経費的にも記念行事もできないような状況でした。

今思えば私が代表になる前、70名を超えた社員も30数名に減り、果たして会社存続が果たせるのかどうかの瀬戸際でありました。

ただ、そのような状況のなか、残られた社員の皆様の努力と発注元のご理解をいただき受注業務も少しずつ回復してきました。

私自身は今までの経歴から会社経営の経験はなく戸惑うばかりであり、財務状況分析など会社経営のノウハウを得るよう勉強したものでありました。まことに頼りない代表であったものです。

しかし、創業者であり前代表取締役の富貴沢さんのおかげで会社の流動資金は相当額残っており、それを原資として会社経営を続けることができました。

私としても、それを食いつぶさないよう少しでも営業利益を出そうと業務受注確保のため努力してきたつもりでした。

また、当社のような会社の基本は社員の技術力にあり、それを向上させるには何が必要かを考えるとき、やはり社員個々人の資格取得のための努力が必要と考えました。

そのため朝礼の際に、5年間は待つのでそれぞれが目指す資格を取得するように呼び掛けましたが、その結果多くの社員が資格取得を果たし、特に技術士には10名以上の社員が目標の5年以内になってくれました。まことに有難く、またその努力に感謝したものです。

さらに私の後を引きついで伊澤さん、そして現代表取締役の見目さん、そして役員の皆様、それぞれ努力をなさって、現在の会社の隆盛があると考えております。

最後に私自身のことで恐縮ですが、最近特に物忘れがひどくなり本当に年を取ったものだとつくづく思うこの頃ですが、健康上は月一回の血液検査の結果からでは血糖値が少々高いほかは、とくに問題となるようなことはないとい医師からいわれております。

今後とも栃木県に「富貴沢建設コンサルタンツ」ありと、引き続き評価されるような会社となるよう、経営者、社員ともども、ご努力されることをお願いして八十路にあたってのおもいいたします。





第三代 社長

伊澤 仁一

## 記憶に残る出来事

令和4年6月に創立50周年を迎え、記念式典及び祝賀会が開催されましたこと、おめでとうございます。これも社員一同の努力と発注者の皆様方のご指導、ご支援の賜物と感謝申し上げます。今回の記念誌の発刊に当り、会社の一時期を担った者として記憶に残る出来事について記したいと思います。

### 【1年前のあの時】

当時は、民主党政権下であり、「コンクリートから人へ」の政策転換で事業仕分けが行われ、公共事業の削減が進み、私たちにとっては大変厳しい時でした。私は入社3年目、専務でした。その日、私は何時ものように、各発注機関を訪れていました。話も終わり、建物から外に出ようとした時、突然床が揺れ始めました。揺れはどんどん大きくなり、立って居るのがやっつとで壁に手をあてていましたが、これは危ないと恐怖心を感じ外に飛び出し、座り込んで地震が収まるのを待ちました。どれ程、待ったかはよく覚えていません。ただ、大変な事態が起きたのではないかと思いつつ会社に戻りました。(会社は被害がありませんでした)帰路の道路は車も少なく、信号機は赤・黄の点滅でした。途中、車でニュースを聞きました。

2011年3月11日(金)午後2時46分 東北地方を中心に未曾有の被害を引き起こした、マグニチュード9.0という超巨大地震です。帰宅後、妻に今日の出来事の一部始終を話しました。妻も突然のことで一瞬動くことができなかったが、すぐに外に飛び出し地震が収まるのを待ったそうです。翌日は土曜日でした。私事ですが、誰も住んでいない我が実家も被害を受け、割れた食器類、倒れたブロック塀の片付け等、後始末の手配等に苦労しました。

13日の日曜日には、早速、某発注機関から道路構造物の安全性の点検・調査依頼があり、至急、社員とともに現地に向かい対応しました。月曜日には、社内に、関係機関の点検・調査依頼に対し支障が無いよう万全の体制を図るよう指示しました。具体的には、現地調査に必要な車の準備(燃料確保)、高速道路は被災により特別車を除き通行止めとなり、一般道路利用のための道路情報収集、又、計画停電に対する効率的な作業体制の確保等を図りました。その後、各方面から多くの点検・調査依頼がありましたが社員一同、協力のお陰で無事乗り切ることができました。感謝です。

東北地方太平洋沖地震による災害、及び、福島第一原子力発電所事故による災害は1万8425名の死者、行方不明者が出ました。未曾有の災害をもたらした東日本大震災から11年が経過しますが、東北3県、特に福島県の復興はまだまだ途上であります。公共事業に携わる者として、急速に迫りつつある少子高齢化の中での社会資本整備の在り方に関心を持つことも必要な事と思います。気候変動に伴う地球規模での熱波、山火事、高潮、干ばつが多発しています。国内においては、毎年のように豪雨による洪水、土砂崩れが起き、甚大な被害が起きており、国土強靱化に向けさらなる、防災・減災対策が是非必要であると考えます。

又、コロナ過とウクライナ侵略で食糧・石油危機、そして、円安、物価高と経済が停滞し憂慮すべきことです。我々、建設コンサルタントの仕事も直接対話からリモートへと変化し、人とのやり取りや、繋がり、空気感がなく、希薄で何か物足りない感じがあります。私たちの仕事は技術も重要であるが、現場や人との関わりがより大切と考えます。

発注者から信頼され要望に応え、常に利用者の目線に立ち、地域住民に喜ばれ、安全・安心な土木構造物を設計することが使命であると思います。

建設コンサルタント会社として、地域社会と共に50年、そして、さらなる技術向上を目指し、未来に貢献する会社となることを望みたい。